論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博　士　（　教育学　）	氏名	金　　道　　煉
学位授与の要件	学位規則第４条第1・２項該当		

論　文　題　目

韓国における高校選択科目「東アジア史」に関する研究
－多元的な市民性を導く歴史教育の可能性－

論文審査担当者

主　　査	教　授	木　村　　博　一
審査委員	教　授	棚　橋　　健　治
審査委員	教　授	由　井　　義　通
審査委員	准教授	永　田　　忠　道
審査委員	准教授	渡　邉　　巧

〔論文審査の要旨〕

本論文は，韓国の高校選択科目「東アジア史」の教育課程から教科書・授業実践・学習評価に至る分析を通して，歴史教育における多元性と市民性の表象を描き出し，その検証までを目的とする。論文の構成は，次のとおりである。

序章では，本研究の目的に続いて特質と意義を述べている。本研究の特質と意義は，第一に「東アジア史」教科書の先行研究では実現されていない総合的で検証的な新たな成果と課題を提示できる点，第二に自国史の相対化を試行する授業実践を通して，日本と韓国の歴史的な葛藤に対する高校生の認識の現状や変化，課題を解明する点，第三に「東アジア史」における授業実践から学習評価の実相について，歴史的エンパシーを分析指標として解明する点である。

第１章では，「東アジア史」の誕生と内容の展開過程について，「2007 改正教育課程」から「2011 改正教育課程」と「2015 改正教育課程」を経て，主題史的な整理のあり方と取り扱う地域や時期に関する諸問題，学習者の負担軽減などを理由に単元および内容要素が徐々に縮小される方向に進行していった実相などを明らかにしている。

第２章では，批判的談話分析の一種でテキストを一つの意味を含む節単位に分け，その中で行為者(主語)とプロセス(動詞)がどのような意味を表すのかを類型化する SFL 理論による分析によって，典型的な単元「17 世紀の戦争」から明らかとなる「東アジア史」教科書の特徴について「韓国史」教科書との比較から次の三点を指摘している。第一にプロセスの類型から見ると，「韓国史」が物質プロセスの比重が圧倒的であるのに対して「東アジア史」は関係・心理プロセスの割合が相対的に高い点，第二に主語から見られる客観性と多様性がある点，第三に主語とプロセスの関係から見ると「韓国史」が戦争の一方的な側面を強調するのに対して「東アジア史」は両面をすべて扱っている点である。

第３章では，他者理解を志向する授業実践として，日本と韓国の両国の教科書を両国の高校生が比較し合う探究学習を実施した結果の分析と考察結果を明らかにしている。「東アジア史」と「日本史 B」の教科書の「壬辰戦争」と「文禄・慶長の役」に関する叙述を両国の高校生が直接比較・対照することで，歴史教科書の叙述はどのような方向に進むべ

きかを生徒なりに表明できることを目指した結果，「東アジア史」の学習者に現れた特徴として「東アジア史」の教科書の叙述構造と類似した認識構造を示している点とともに，「東アジア史」の学習者が科目の目標である歴史的な葛藤解決のための他者理解と平和指向的姿勢を備えるようになったとまでは断言することは難しいことを指摘した上で，それにもかかわらず「東アジア史」が和解と共存に向かう道にその可能性を一定程度は担保できていることを分析的に述べている。

第 4 章では，「東アジア史」の評価方法としてのパフォーマンステストに注目し，韓国 A 高校の「歴史新聞作り」を事例として，生徒の歴史的エンパシー段階の分析と考察を行っている。その結果，A 高校の「歴史新聞作り」に現れた生徒の歴史的エンパシーの段階として次の 2 点の特徴を指摘している。第一に A 高校におけるパフォーマンステストとしての「歴史新聞作り」では歴史的エンパシー段階の初期段階とされる第三段階に該当する新聞記事の数が最も多かった点，第二に一方で A 高校においては歴史的エンパシーの段階の最上位とされる第四段階と第五段階まで到達できている新聞記事が一定数確認できたことで最上位段階に達した生徒たちを下位段階の生徒たちが足場かけ(scaffolding)として活用できた可能性がある点である。

第 5 章では，「東アジア史」の可能性・意義・課題として，自国史中心の視点から脱して，多様な過去の行為者の行為をその時代の脈絡と連結して眺めることで歴史教育における多元的な観点を涵養する市民性教育への転換可能性を示していると評価している。

終章では，本論文の成果の整理とともに，残された課題として次の三点を明示している。第一に SFL 理論に基づいた教科書分析が「東アジア史」の他の単元および他の科目との比較・対照を通して，より総体的に解明すべき点，第二に日韓両国の生徒の認識比較研究も更に拡張・深化されなければならない点，第三に歴史的エンパシーを評価ツールとして活用するための具体的なルーブリックの開発と適用の必要性である。

本論文は，次の三点で高く評価できる。第一に「東アジア史」の設置から直近に至るまでの教育課程改正に伴う科目の目的，性格，内容体系の変化の様相を総体的に整理した点，第二に漠然とした印象やニュアンスではなく，批判的談話分析である SFL 理論を通して教科書を分析することで，「東アジア史」が「韓国史」より多元的観点を示していることを具体的に検証した点，第三に授業実践を通して日韓の生徒の認識の違いを高校段階で究明した点と「東アジア史」を受講した生徒たちが自国史だけを受講した生徒とどのような違いがあるかを授業レベルで解明した点，第四に歴史授業の評価方法としてのパフォーマンステストと歴史的エンパシー段階の活用可能性を提示した点である。本論文は「東アジア史」の教育課程から教科書・授業・学習評価をマクロ・ミクロ・超ミクロのアプローチを通して，「東アジア史」が自国史の相対化の可能性を示し，歴史教育における多元的な市民性教育としての端緒として位置づけられることを検証したことに，学術上の大きな新たな意義を認めることができる。

以上，審査の結果，本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

令和 5 年　2 月　16 日